

東
VALUE
庄

北
SIGHT
内



鶴岡織物工業協同組合 理事

大和 匡輔 (やまと・きょうすけ)

1958年山形県鶴岡市生まれ。明治薬科大学薬学部製薬学科卒業後、日本チバガイギー（現ノバルティスファーマ）株式会社に入社し、大学病院担当MR（医薬情報担当者）として勤務。退社後、東福産業株式会社に入社し、2001年より代表取締役社長。現在、経済産業省地域資源活用新事業展開支援における鶴岡シルク「kibisoプロジェクト」プロジェクトリーダー、鶴岡織物工業協同組合理事、鶴岡市中小企業共済会副会長などを務める。
鶴岡織物工業協同組合
〒997-0057 鶴岡市安丹字村上1-1
http://kibiso.jp/
TEL 0235-22-0507・FAX 0235-24-6368

歴史ある伝統産業といえども、「伝統」という地位に安住しているだけでは未来につながっていかない。鶴岡織物工業協同組合が取り組む「kibisoプロジェクト」は、東京のデザイナーとの出会いが契機となり、デザイナーの熱意と地元職人の技によって、まさしく地域に「眠っていた」資源を掘り起こすことで始まった取り組みである。鶴岡から世界へ向けて発信される「kibiso」に注目したい。

新たな視点で飛躍する伝統産業 kibisoプロジェクト

鶴岡シルクの歴史

鶴岡絹織物産地は明治時代に庄内藩士3,000名が刀を鋏に変え、松ヶ岡を開墾し桑の木を植えたことから始まった。庄内にはそれまでなかった産業を興す事を目的とし、お国のために殖産興業に徹し、やがて養蚕から製糸、機織、精練、染色、縫製工場ができ、特に斎藤外市という発明家が出たことにより投資化が着目し、大規模な工場が次々と出現した。人づくりのため染色学校（現在の鶴岡工業高校）や縫製学校（現在の鶴岡中央高校）などを備えた、今で言う産業クラスターが形成された一大産業（鶴岡市の就業人口の半分を占める）となる。しかし戦後さまざまな要因（合成繊維・廉価な中国製品）により衰退し続けることとなるが、現在でも養蚕から縫製まで絹製品が出来上がるすべての工程がそろっている。このようなフルセット、ウエルバランス（調和のとれた）あるいは地域内一貫生産ができる場所は日本では鶴岡だけとなり、絹産地の北限でもある。

委託加工中心で良い物を作ってさえいれば良かった時代から、自立しなければいけない時代へと変わり、織物組合各社はそれぞれ独自に活路を見いだそうとしていたが、時代の流れはあまりにも急激であった。

kibisoプロジェクト

東京デザイナー協議会の岡田茂樹元議長が鶴岡を訪問した際に、転機は訪れた。

松岡(株)の土間に放ってあった「きびそ」を手にとった岡田氏は、素材の可能性を直感。東京に戻り、すぐさま世界的なテキスタイルデザイナーの須藤玲子氏に連絡した。須藤氏も「面白い」と絶賛。われわれ鶴岡織物工業協同組合は2007年、2人の総合プロデューサーのもと「kibiso」を鶴岡シルクのフラッグシップとする構想を立案。経済産業省の地域資源活用事業の認定を受け、「kibisoプロジェクト」が本格的にスタートした。

「きびそ」とは製糸の際、繭から糸口を見つけ出すために繰り返した糸を乾燥したもので、蚕が繭を吐いた時、最初に出る糸である。1つの繭はおよそ1,200メートルの1本の糸でできており、「きびそ」はその5%程度を占める。昔は絹紡糸（くず繭などを精練して紡績した糸）の材料として使われていたが、近年では、大部分が飼料として転売するか、廃棄されてきた。「きびそ」は太さが不均一で、硬くごわごわして肌触りも決して良くはない。つまり上等で均質な生糸づくりにはそぐわない副産物なのだ。

しかし、天然でありながら金属フィラメントのようなハリと量感のある素材に惹かれた須藤氏から

「これを織れるようになったら世界で初めての織物になる。立体的な布を作りたい」と強い申し出があった。最初、製糸の職人はとても無理だと思ったが、須藤氏の熱意におされ、職人気質でついに織機で織れる太さにすることに成功した。

シルクは紫外線吸収、抗酸化作用、抗アレルギー作用などさまざまな機能を持つ優れた素材だ。「天然繊維が持っている機能は最先端のものである」と須藤氏は考えており、その機能を生かした、今まで見たこともない、とてもシルクとは思えない彼女のデザイン作品は、われわれの心を動かした。われわれには良い物を作るハードはそろっていたが、ソフトつまりデザインが欠けていたのだ。

kibisoブランドの確立

岡田氏の紹介で新進気鋭の若手デザイナー8人を鶴岡に招聘し、蚕の育成現場や製糸工場を体感してもらった。彼らは、五感で感じとった命やもの大切さ、エコロジーへの思いをそれぞれの作品に表現してくれた。その結果、2007年に東京表参道で開催した第1回目のkibiso展示会には業界関係者はもちろん、マスコミをはじめとして国内外からたくさんの方が来てくださり大盛況だった。

また、大正紡績(株)近藤氏とコラボレーションし、「きびそ」とオーガニックコットンの混紡糸を作ることにより、さまざまなニット製品が生まれ、ニューヨークやフランスのメーカーからの引き合いが来ている。

ものづくりと並行して「きびそ」を「kibiso」で

商標登録し、また、ロゴマークデザインを、au携帯・つや姫などのデザインを手がけた佐野研二郎氏にお願いして、鶴岡シルクのシンボルとして世界に発信できる仕掛けもつくった。「きびそって英語でなんて言うの？」ではなく、世界中で「kibiso」で通用するようにしたのだ。

一度回り始めた歯車は加速度的に回り続けている。この春からは「kibiso」とハンティングワールドとのコラボレーションで誕生した、バッグ・ショール・帽子が世界中で発売されることになった。

五感で感じるものづくりから地域活性化へ

鶴岡に来てくださった方々は口をそろえて「鶴岡はいいところだ」とおっしゃっている。「この土地には日本人が忘れかけた何かがある」と、日本のものづくりが衰退していくなか、閉塞感が漂う今の日本で、鶴岡から、日本人のアイデンティティーを考えさせる取り組みが「kibisoプロジェクト」なのだ。

今年も新たにたくさんの方々が鶴岡を訪れる予定である。メイドイン日本、メイドイン鶴岡にこだわるには、より多くのクリエイターに鶴岡を訪れていただき、風土や絹の魅力を五感で感じながら、感性に訴えるものづくりを共に行っていくことだと考える。

また、鶴岡は藤沢周平作品の映画化によりロケ地として観光に訪れる人が増えている。最初に申し上げた通り、鶴岡絹織物は、侍が作った産地、鶴岡シルクの原点である松ヶ岡を中心としたSAMURAIシルクとして、今後地場産業である鶴岡シルクと観光を結びつけたコンテンツ（映像）を製作することにより、絹の魅力、観光での魅力を世界中に発信していき、地域の活性化につなげたい。



「きびそ」（左下）とkibisoの生地